対談「センター長に聞く」

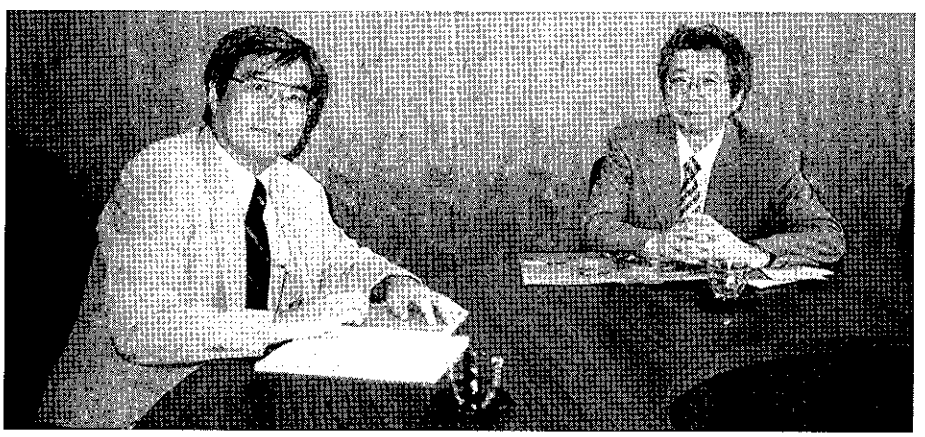
この対談が掲載されるニュースは，新設の名古屋大学情報連携基盤センターが発行する最初のニュースです。新設の広報専門委員会で，新センターの最初のニュースをどのようなものにするかについて大議論がありました。そのような議論の中で，ニュースの企画も検討されました。その結果が，旧来の巻頭言にかえての，広報専門委員長（村上）と新設の情報連携基盤センター長（阿草）の対談となりました。

対談という企画は，過去のセンターニュース編集経験者にとっても初めての経験で，日程調整の心配から，対談の録音に失敗しやしないかといった不安等が多々ありました。この記事は，その対談の内容を筆記したものです。

前置きは，これくらいにして，お二人の先生のお話に耳を傾けてください。

村上：今日は，新設された情報連携基盤センターについて，いろいろお伺いして，広報の実を上げようということでよろしくお願いします。

阿草：よろしくお願いします。



阿草センター長　　村上委員長

村上：私が名古屋大学に助手として着任したのは1975年ですから，もう27年も前になります。着任した翌日には，情報連携基盤センターの母体となった大型計算機センターのユーザーになりました。最初にもらった課題番号[1] が「ev 0437」だったということをいまだに覚えています。

1　センターでは，ユーザーIDを課題番号と呼んでいました。研究課題ごとに独立にIDを申請する時代だったので。

たぶんabcde…ときて，あの年が設立から5年目かな？　だから，5年目にユーザーになった人は頭文字がeだったのでしょう。

あの頃はカードの時代で，カードの束を部局から担いでセンターに来ていました。まだ，カード読み取り機も計算機と一緒に「奥の院」にあって，オペレータにカードを手渡ししていた時代でした。

朝早くカードを出して，夕方に計算結果を受け取れるときもあり，つぎの日になるときもあるという状態でした。繁忙期[2] になると2～3日くらいかかりました。でも，運がいいと，日に2回ローテーション[3] できました。

あの頃のセンターは賑やかでしたね。私は，文系にしては割と理系の先生の知り合いが多いのですが，計算機利用に来ていて，センターで知り合った方が多いからです。あの頃のセンターは，コンピュータ利用者の一種のコミュニティの場になっていた感がありました。

大型計算機センターが，今度新しく情報連携基盤センターになって，これまでのセンターとどんな違いが出てくるかということが，大方の興味のあるところだと思います。新センターのパンフレットに阿草先生がお書きになった「特別な意識なく利便性を享受できる情報環境」これをひとつのキーワードとして，センターのこれからの展望をお話しいただきたいと思います。

阿草：そうですね。

昔は計算機を使うこと自体が明確な目的だったと思います。センターは高価な特殊装置であった計算機を共同で使うための場所でした。コンピュータが一般的になった今日では，それが特殊な計算機であるスーパコンピュータを使うセンターとなりました。その利用者は，おそらく，いまや全国に設置されているすべてのスーパーコンピュータのユーザーを勘定に入れても一万人はいないでしょう。広く計算機を利用してもらうセンターから，特殊な計算を必要とする限られた人のためのセンターになってきたわけです。

大学の中のサービスセンターとして，センターに何が求められているかを考えたとき，多くの構成員へのサービスのためには，センターに置かれたコンピュータの利用を提供するというよりは，コンピュータをとりまく環境全体を見渡したサービスになってきているのだと思います。

今の時代，計算機とネットワークというのは区別がつかなくなってきて，Network as Computer とか，Computer as Network とかいわれる状況です。センターを訪れる人はピーク時より激減しています。

今も，「計算機関係で困っていることがあるからセンターに相談にいってみたい」という人は多いと思いますが，これまでのセンターのサービスはスーパーコンピュータ利用に特化しすぎていたのではないかと感じています。これからのサービスは，現在の顧客のニーズを考えて，

2　卒業論文や修士論文シーズンのことです。

3　カードを出して，計算結果を受け取ってデバックを1ラウンドとして，2回できたということ。

ネットワークを含め広く情報化支援サービスを提供すべきではないでしょうか。

村上：私はずいぶん最近まで，FORTRAN で計算して，手元のワープロで論文を書くというスタイルで生活していました。これがすごく使い心地がよかったので，初期のパソコンブームには乗り遅れたのですが，乗り遅れたために，とっつきやすい Windows から入れて助かりました。そうなると，大型計算機センターの計算機にアクセスしなくても，データを入力し解析して，論文を書くという作業が自分の机上のパソコンだけでできてしまう。この範囲では，ほとんどセンターの必要性はありません。

しかし，一方で，部局単位で独自にメールサーバを管理したりすることは，セキュリティとかコストとかいったいろいろな面で大変だと感じています。今，私にとってセンターは，まずメールの提供，大量データの保管，その２点で利用させてもらっています。特にセンターがデータ保管をしてくれている安心感は非常に大きいものがあります。

阿草：昔は，「計算サービス」というと，データをもとに統計処理するといったデータ処理[4] であることが多かったのですが，今はデータ処理というより，広い意味での情報処理ですね。自分の文書を管理するとか，デスクワークに付随するすべての情報処理であって，データというより情報と呼ぶほうがふさわしいものを処理しています。

センターで提供すべきサービスを考えると，例えばネットワークサービスは，電話とか水道でいうと，管路のサービスだけでなく，水質検査をやらないといけないし，タンクはときどき止めてクリーニングしないといけない。無停電電源装置だってバッテリー交換したり[5] と，直接利用者に見えなくても，やらなければならないことがたくさんあります。それが安定したネットワーク環境を提供しているわけです。

文系の先生も多くの計算機を部局に置くようになってきました。ブレード・コンピュータ[6] といって１台の筐体の中に何十台ものコンピュータを詰め込んだコンピュータ・システムがあるのですが，それをネットワーク経由で使ってもらったら，自分でハードウェアのメンテナンスはしなくていいし，データのバックアップも気にしなくて良くなります。センターに置かれた計算機利用だけでなく，あらゆる計算機利用の問題に関して，何らかの解をセンターは提案し，提供するべきと思っています。

4　センターの英語名称が Data Processing Center となっているところもありました。その当時，Data Processing というのが先端キーワードだったこともあります。計算機業界はキャッチコピーが好き！

5　主なネットワーク機器には落雷による瞬間的な停電対策のために無停電電源装置がつけてあります。無停電電源装置の保守のために停電するというのは矛盾だと思いますが，通電したままでのバッテリー交換での事故は作業者の命にかかわる問題です。

6　Blade Computer。乱暴にいってしまえば，ラックに弁当箱大に実装したパーソナルコンピュータを詰め込んで，設置スペースと運用コストを下げようというコンピュータです。

村上：そうですね。

部局での情報化整備にはいろいろ問題がありますね。ひとつは，担当者の高齢化です。担当者が技術の進展についていけなくなる。それで，若い人をということになると，その人たちの研究時間が奪われ，研究者としての処遇の問題が生じてしまいます。部局として，コンピュータを大量に導入し運用するということは，いいことなのかどうだろうかと，ずっと疑問に思っていました。今までずっと十数年間（笑）。

阿草：たしかに，計算機管理のアウトソーシングを考え，大学でやるべきことは何かとか，どこまで自前でやるかといったことを再考しなければならないと思います。ブレード・コンピュータの導入や全学メールシステムのように集中化のメリットも考える必要があります。ほとんどの研究者は，計算機の提供する機能を使いたいし，他の人の利用を意識せずに自由に利用したいと考えていると思いますが，機械を持つことが目的では決してありませんよね。音楽にしても，聴くことが目的で，レコード盤を持つことが目的でないというのと同じ意味です。利用者が個人で保有しているのと同じ自由度を持ち，その管理は誰かがやってくれるというのが望みでしょう。そのためにどのようなサービスが提供できるかを，センターは考えるべきだと思っています。

これまでもセンターはいろいろ考えてきたのだと思います。ただ組織改革の際にはなんらかの変換点を持てますが，今までのスーパーコンピュータのユーザーを声やサービスの継続性保証のために今まで動けなかったのではないでしょうか。その時間の流れの中で，センターサービスと学内ニーズが乖離したのかとも思います。

名古屋大学ではNICEの運用もセンターが行ってきていました。今後は，センターが明文化された形でNICE運用の責任を持ち，また，そしてデータアーカイブの機能も持つと宣言しています。学内ニーズに合致するサービスを，どんどん提供したいと思っています。

村上：私は，1995年に長期在外研究員でオランダに行きました。そのときに，デスクというのは，基本的にその上にターミナルがあって，その時点でも，そんなのはもうあたりまえだったはずなのですが，日本の状況からするとかなり驚きました。しかも，ターミナルをメンテナンスしてくれる専門の組織がありました。依頼してもお茶の時間だからと言ってなかなか来てくれないこともありましたが(笑)，信頼はできるわけです。困ったときにどこへ電話すればいいかわかっているわけですから。95年のことでしたが，日本ではなかなかああいう環境になりませんね。

阿草：そうですね。僕がアメリカの大学に行ったとき，図書館で最初に何を言われたかというと，「検索システムをマスターせよ」でした。図書館を使うためには，検索システムの利用が前提でした。大学の構成員になるためには，コンピュータの存在を前提にして，どのように大学のリソースにアクセスすることが研究の効率化がかかせません。大学内の情報を共有する基盤が

できている感じです。

多くの大学だと数十人規模のテクニカルサポート部隊があります。名古屋大学ぐらいの規模だと当然それくらい必要なはずです。今までなかったことが，不思議な感じがします。

村上：そうですね，なかなか日本の体制の中ではむずかしかった，というか…

阿草：人員が限られていますから，テクニカルサポート自体も情報化を駆使し，無駄を省いて提供する必要があります。

各大学に基盤センターがありますが，名古屋大学は名称に「連携」を入れました。情報基盤というハードではなく，それによって各構成員が連携し，互いにサポートできるという機能を強調したかったのです。連携は学内にとどまらず，「情報連携基盤センターが社会と大学との接点」「社会に対する広報発信機能」という意味もあります。

大学の知財である，研究開発成果などのアーカイビングもわれわれの責任です。あちらこちらで「連携？　なぜこんな言葉が組織名についているのですか」ときかれます。だいだい，組織の名称がシンプルであればあるほど目標が明確な気がしますよね。その点からすると，情報連携基盤センターのように，名前が長いというのは，ちょっと気にはなっています。

村上：だけど最近は6文字が多いですよ（笑）。

今までの大型計算機センターのユーザー側からみると，スーパーコンピュータというのはそれなりに納得できますよね。そういうものが，進化の先端として存在することはわかります。それから，ネットワークのサービスについても，今までにどこにお願いすればいいのかわからなかったことはあるけど，はっきり位置付けていただけたというのもありがたいことです。あとは，図書館的な機能ですね。この部分が今までと少し違って目新しいところになると思います。アーカイブ機能ですね。これは，新たにどういった機能が付け加わると考えればいいのでしょうか？

阿草：例えば，もともと大学も博物館だったとか図書館の延長として成立したという意味において，「本に記された事実」と「実体を持っているもの」それをアーカイブしていくのが大学の機能だったわけで。どちらもコンテンツが重要なのですが，図書という「もの」を図書館が管理し，それ以外の「もの」を博物館が管理しているわけですが，デジタル化の進展により，これらの「もの」はコンテンツとしてデジタル化されたアーカイブされようとしています。そのアーカイビングシステムはこのセンターが持つことになります。何をデジタル化するかは図書館なり博物館が判断しますが。実際，コンテンツとして何が入るかわからないのにシステムを設計できるか問題ではありますが，アーカイビングには計算機システムが必要であることは間違いないので，本センターの役割が大きいと思います。

村上：電子ジャーナルというのは，なかなか皆さん理解しにくいみたいですね。例えば，「著作権ってどうなっているのだろう？」ということは気になると思いますが。

阿草：著作権問題の専門家に聞きましたが，権利の行使で利益を得ることができれば権利として顕在化するとのことでした。例えば映画には配給権があるのに，なぜ本には配給権がないのでしょうか。古本は売っていいのですが，中古のゲームソフトは販売についてもめています。技術の変化により権利も変わってくるものだと思います。大学として，社会の枠組みの中で，知的所有権に関し意識は重要で著作権の管理にも重要な感心を持つべきものと思います。センターとしても，特にソフトウェアに関して，著作権管理サポートを考えたいと思っています。

村上：やはり論文のパブリケーションの考え方自体も変わっていたということはありますね。

阿草：そうですね。特にWeb関係のソフトウェアの会議ですと，ほとんど印刷物としてのジャーナルは出さなくなってきています。CDで配布し，アーカイブサイトに置き，ある期間アクセス可能を保証します。

村上：数日前にオランダの共同研究者から論文がPDFファイルで送られてきました。既に刊行されているものですが，なにしろこの雑誌がどこにあるのかわからないのです。そこには，「お前のWebにこれを載せてよい。ただしプリントアウトしてはいけない」とかいう条項がキッチリと書いてあって，それで，「著作権をプロテクトせよ」というわけです。私はこういう経験が初めてで，誠に時代は進んでいるのだと実感しました（笑）。

阿草：我々の学生も研究に際してのサーチエンジンを使って自分の興味のあるキーワードを探すことから始めます。だから，オンラインで検索可能な論文でないと参照されにくいのです。また，ジャーナルの多くがオンライン化されてきています。僕の専門のコンピュータ分野についても，紙ベースの本やジャーナルはもちろん出ますけど，同じものがオンラインでも検索・閲覧可能になってきています。

村上：そうなっていますか。文系では，そもそも電子ジャーナルはほとんど存在しません。例えば，心理学は今，３つぐらいの部局に分かれていますけれど，どの部局でどの雑誌をとるかというのが，けっこう重要な問題です。権威がある雑誌だと我々が思っているものほどオンラインジャーナル形式のものがなく，３つの部局でそれぞれ持たなければならないんですね。

阿草：ジャーナルに出さないと研究したことにならないような組織ですか？　今だと国際会議が活発で，国際会議で活躍している人の方が，アクティビティが高いような雰囲気ですが。

村上：私の研究分野はサイコメトリックスといって，形は非常に理系っぽいです。論文も。

阿草：TeX で書かれるということはそうでしょうね。

村上：日本電気の佐藤隆博さん，まさに e-Learning とかそういうことの草分けみたいな方なのですが，この方を非常勤でお呼びしたときに「コンピュータ関係の分野というのは，本当にスピードが速くて，オーソライズされたものが，すぐに入れ替わってるんですよ」とおっしゃっていました。センター長のお話は，そんな世界の話を実感させる話ですね。ところが，サイコメトリックスとなると，認められるまでが非常に大変ですが，一旦権威の座についたものは，長時間その座にいます。その辺のスピードというか変化の度合いが違うのでしょうね。

阿草：このセンターでのサービスにも情報技術の進歩に起因するものもあると思います。例えば，磁気テープや5インチフロッピィといった過去のメディアのコンバータはセンターで持つかという話もあります。過去のデータや論文のアーカイブを考えると，このような問題は無視できません。電子メディアの寿命は，メディアが物理的に読めなくなるより，フォーマットがなくなったり，読むための装置やソフトウェアがなくなったりすることで決まるようになっています。

アーカイブというときに，コンテンツそのものがもちろん重要ですが，メディアについての継続性をどうやって保証するかということは避けて通れない問題です。各所でバラバラに持つのではなくて，どこかのセンターが持てばいいわけです。

村上：そうですね。

阿草：それから，電子ジャーナル的なものが出始めると，アーカイブがきちんとしていないといけない。例えば，名古屋大学の先生が，どこかの Web ジャーナルに論文を出したとする。ところが，そのジャーナルを出している国際会議に対する時代の要請がなくなったとしますと Web サイトが残っていることは期待できません。しかし，研究論文が公表された事実はなくなるわけではないので，そのような論文の存在，公表の継続性をどうやって保証するのでしょうか。

大学の研究者が，どのような論文をどこに発表したかということは大学として持っておきたい情報だと思うのですが，論文そのものも管理する必要が出てきそうです。

村上：大学のもうひとつは教育の機能ですね。

今までも広報教育小委員会があり，教育や啓発活動をしていましたが，情報メディア教育センターができてからは，かなり役割分担をしていました。センターのパンフレットを拝見すると，たとえば再教育のシステムについても書かれています。そちらの方はどうでしょうか。

阿草：大学における情報基盤とは何かという話になるかと思います。情報基盤は，当然，研究の基盤であり教育の基盤ですね。しかし，教育については，基盤が大事なのか，基盤の上のコンテンツが大事なのかということは非常に微妙な問題です。教育のプロでないといいコンテンツは作れないわけですが，先生が訊ねられたのはおそらく両方ですよね。

村上：そうです。そこです。

阿草：やはり情報基盤として今後こうなるはずであるというショールームのようなものを持ちたいですね。せっかくいい教材の概念や教育環境があるのに知られてないのならば，それらを見える形で基盤として提供し，皆さんに「ああなるほどこういうことができるのか」と知ってほしいと思います。

情報メディア教育センターは学内の学生のみを対象にしています。我々が教育といっているのは，先生方の研究のやりかたや教育のやりかたが変わる可能性がある場合，相談にのったりコンサルティングしたりするという意味の教育ですので，少し違うかもしれません。

村上：研究教育活動そのものをどう支援するか，ということについてはどうでしょうか。

阿草：いわゆる研究教育活動の情報化武装をするために必要な啓蒙・教育をするということです。例えば，昔は計算機を使うだけで，新しい研究といった観がありました。今後のセンターは，計算機の使い方を教えるだけでなくて，計算機の機構，知識の処理方法を学ぶことを通じて新しい研究を創造しようと活性化しようとしています。それと同じことが…

村上：教育についてもいえるということですね。

阿草：はい。そういう意味での教育ですので，我々がどこかの部局の学生の授業をするという意味での教育ではありません。ITやマルチメディア化で変わるはずの教育を基盤的にどう支援していくかを考えています。そのために必要であれば教育，すなわち，基盤を使いこなすだけの教育もするということです。

村上：なるほど。そうなるとこれは，例えば，教養教育院であるとか，高等教育研究センターあたりとの連携という形でしょうか。これらの組織は，FD[7] に非常に熱心ですよね。

阿草：FDの一環という意味でなら極めてよく合いますね。

7　ファカルティ・ディベロップメント。

村上：まさにFDですね。

最初に申し上げたことですけれども，昔はセンターに人が集まってコミュニケーションの場が成立していました。そういう機能がセンターから失われて，人が去っていったという感じだったのですけれども，こうしてみると，また人が集まる機会が増えてくるということでしょうか？

阿草：ぜひ，そうしたいものですね。

一つの例ですが，ある計算機を自分の研究室に導入したいというときに，ネットワークとの接続性が気になったとします。その接続性テストみたいなことをセンターでできたら面白いなと考えています。機器を持ち込んで，周りの人とお互いにいろいろ議論できますね。いろいろな機材を持ち込んで，パフォーマンスの測定やプロトコルの検証などができる場を提供したいと思っています。ネットワーク時代の基盤に，自分たちの研究装置をどのようにつないだらいいのかをセンターで実験ができるような…いわゆるオープンラボ的なスペースともいうような場でしょうか。

村上：まさしく，オープンラボですね。

広報に関して言えば，講習会がありますが，出席者が減ってしまった時期がありました。これは，講習会の広報が不十分だったこともあったので，広報の方法を工夫したら，受講者がまた増えてきました。まったくニーズが消えてしまったわけではなくて，対面的な教育や情報提供を受けたいという人は結構いると思います。つまり，Webがあるから十分というわけではないと思います。人と人とのコミュニケーションのための役割というか，せっかくこの場所があるのだから，もう一度，センターを人が集まる場にできないのかな，という夢があります。

阿草：夢で終わらすのではなく，実現のための計画が必要です。

昔は，カードケースを持ってきて，プリンタ出力を持って帰り，たくさんの人が出入りしていたはずです。このセンターの建物は多くの人数を受け入れることのできるものですよ。ただ人が集まればいいものともいえませんが，コミュニティを形成する場とありたいですね。村上先生の専門は心理学ですが，僕たちもソフトウェアを作るとき，最後の拠り所は人の心です。いいソフトウェアは皆に喜んで使ってもらえますが，そのようなソフトウェアを思いつくためには「人は普通こう考えるはずだから」ということが見えてくる必要があります。難しいのはどうやって作るかではなくて，何を作るべきかです。人がなぜそのような機能を望むのかが理解できないと新しいソフトウェアは作れないのです。単なるソフトウェア技術ではなく，人との交流の中で理解するような，多くの学問が交流するユニバーシティで可能となる研究分野かと感じています。

村上：そうですか。なかなか文科系の者は，計算機屋さんの場に参加しにくいというか，何か貢献できることがあるのかな，という疑問もあるのですが。

阿草：会話というのは，自分が予想もしていない反応が返るからおもしろいと思っています。分野が違う人と話すときには言葉も選びますし，相手の言葉にも注意をして聞きます。その対話が新しい考えをうむ可能性を持っています。総合大学であるというメリットを生かすということにも，センターが貢献するべきだと思います。

村上：そうですね。教育と研究のシステム自体がこのセンターから変わっていくようになるといいですね。

まあ義務だからしょうがないからという意識が教育する側のどこかにあると，学生の不満は大きくなるでしょう。今の授業のありかた，例えば取りたい授業が取れないというようなことに学生の多くが怒っています。それが，基礎セミナーなどで書かせたり話させたりするとわかります。

ただ，学生のニーズに合わせてどう改善できるかとなると，なかなか難しいものがあります。先ほどのFDという話がありましたが，もう少し，教員同士のコミュニケーションがあればという気がします。

阿草：世の中変わったと思うことは，今日のように大学が大衆化されてないときは，先生は研究者の親方，学生はその従弟で，「自分の背中をみて勝手に学べ」という感じがあった気がします。私たちのようにそういう時期の教育を受けたものは，それも試練だとか，大学とはそういうものだという意識がどこかにあるようで，意識改革が必要ですね。

村上：今の学生は意味のわからないことはやらない，勉強の意味を納得しないと勉強しないという感じです。むしろ，情報ネットワークができてから，自分で獲得できる情報が飛躍的に増えたので，ますます，そのような傾向が強くなってきていると思います。われわれもそれに適応していかなければならないのでしょうね。

阿草：例えば，現在は親指文化と呼ばれるように，若者は親指[8] が非常に発達しているとか。いつでも携帯で情報を得ていますが，世の中の変化に対応した教育システムも考える必要があります。

村上：それこそ学生の認知システムそのものが変わったと思いますね。ところで，情報メディア教育センターとの関係はどうなのでしょうか？

阿草：他大学の情報メディア教育センターですが，京都大学は総合情報メディアセンターが学術情報メディアセンターに今年改組され，メディアセンターに大型センターが組み込まれた形に

8　携帯電話の入力システムのせいです。

なっています。他の大学で，メディアセンターがなく情報処理教育センターであったところは，情報処理教育センターの改組時期に大型計算機センターと情報処理教育センター，電子図書館などを統合して，メディアセンターの機能を入れた情報基盤センターを立ち上げています。名古屋大学だけが少し違う組織形態ですので，これが外部から見たときに，なんとなく分かりにくいのかもしれません。

“これは他の組織がサポートすべきサービスだ”と縦割りの議論を持ち出してサービスを手抜きしようとするのではなく，情報メディア教育センターなどとうまく連携して，いいサービスを提供したいと思います。他組織と連携をともに，いい意味のサービス競争をしていきたいですね。

これは文部科学省に行ったときに主張したことなのですが，設立の経緯を無視してなんでもかんでもくっつけるのはおかしい，それで大きければいいというものではない。緊張関係のほうが良いことも多いと思っています。

村上：なるほど。

法人化をひかえてどうするか，全学の戦略の中にうまくマッチして生き抜いていけるのかが問われますよね。

阿草：僕もその改組に少し関与したのですが，情報メディア教育センターのメディア教育とは，先生がメディアを駆使して教育することです。学生はメディア教育の中で，予習，授業，復習がどのように変わり，どのように受け入れていくのかを見届ける必要があります。もうひとつは，学生がメディアを駆使してプレゼンテーションができる，自己表現ができる能力を身に付けることを求めています。

しかし，例えば分散化されたメディア教育の部屋の管理や情報ネットワークなど基盤センターが支援すべきことも多くあります。情報基盤センターが学内の管理運用を情報技術を使って効率化するために果たすべきことは大きいと思います。

村上：今，学内は工事現場だらけで，目に見えるインフラは変わりつつあるのはよくわかるのですけれども，こちらのほうも変化しつつあるわけですね。

阿草：今，やっとある意味で体勢が整ったところですね。何らかの形で「やっていること」を「やっている」と言える組織にならなくてはいけません。いわゆる広い意味でのビジュアライゼーションですね。全学的サポートを受けて発足したセンターに成果を見せることは課せられた大きな課題だと思います。

村上：広い意味でのビジュアライゼーションは，本当に研究者としても大事なことだし，教育者としても大事なことですね。そういう文化は我々の世代はなかなかなじまない。若者のウリで

すから学ばないといけないですね。

阿草：この基盤センターの機能についてもう一つ考えていることがあります。それは，情報システムデザイン部門についてです。この研究部門については，ある意味，将来に向けての仕込みだと考えています。大学の基盤を誰がどうやって決めるのですかと，ポリシーウェイティングをするような雰囲気が大学にありますが，この部門を中心にして，センターで企画をして，みんなで旗振りをして，世の中がどちらに進もうとしていて，大学としてはどちらに進むべきかのオピニオンを出すようなこともやっていきたいと思っています。

村上：一種のオピニオンリーダーとしてのセンターですね，大学全体に対する。

阿草：大学だけでなく，社会に対してもですね。あまりはっきり言うと問題もあるかと思いますが，大学はある種の無駄金を使ってもいいと思うんですよ。極端な話，システム導入の際に二～三割くらいまでは使えないものを導入してもいい。自分が自信を持っていれば，少々時期的に早かったために使われなかったとしても，5年後，10年後に一般的になる技術なら，それを実験する冒険は必要です。そのようなことは大学が社会をリードするために必要なことと思います。企業の提案を待つのではなくて，我々が将来を読んで共同で作り上げるのです。仕様書もメーカーと相談するのではなくて我々の夢を書くもので，それをシステムデザイン部門に期待しています。もちろん，全部が全部成功するわけではないですよ。早すぎれば，構想とあわなかったとか，標準規格が少し変わった，ということもありえますが，そういった挑戦的なこともやっていこうと思っています。

村上：まあ，今までもそうだったといえば，そうだったわけですが。

阿草：昔はそうでしたね。今は，大学に余裕や夢がなくなって，社会をリードしていけるものがなくなったということが，日本が落ち込んでいる原因の一つかと思います。例えば国が導入するシステムは何割以上値引いてはいけないという変なことがありますね。確かに社会的に問題になるようなことを起こしてはいけないですが，大学というフィールドで先駆的なことをやらせてもらえる対価として，産業界が進んで値引いてきたことも過去にはあったと思います。大学には，そういうことを言えた時代があったはずで，それを取り戻したいのです。

大学と企業が，丁々発止と「世界はこう動くはずだ」とか「こんなことやっていていいのか」と互いに議論しあいながら，社会をリードしていく気概が必要で，センターがその場になるようしたいと思います。

村上：このところ，開かれた大学ということで，かえって，大学が，ただただ民間にひっぱられている，ということが出てきましたよね。

阿草：大学のリソースを実験に使え，いろいろな面で試行ができるわけですから，大学発と本当にいえる成果を世に問いたいものです。どうでしょうか。連携という名はその思いも込められたものです。

村上：なるほどよくわかりました。ところで，センターニュースの内容も，今まで，センター長からお伺いしたことを踏まえて，かなり工夫していかなくてはいけないですね。

阿草：まずはセンターがこう変わったということを広報していただきたい。その後の広報は，センターの研究部門がその成果を報告できるようにしたいと思っています。例えば1号おきにアイデアを持って特集をするとか，何らかの戦略を持ってやっていただきたい。広報というのは一番大事ですから。

村上：メンバーも若返って大幅刷新しましたし。

阿草：よろしくお願いいたします。

村上：非常に経営的センスが入ってきたと思います。中京大の鈴木先生[9]とか…。広報もある種の文化になっていると思うので，過去のいい点は残したいと思います。

阿草：非常に限られたリソースの中で，また村上先生のようにお忙しい方に頼んでおりいろいろ難しいとは思います。読み物としておもしろいものであって欲しいですね。センターニュースの中身が業務報告だけではほとんど読んでいただけないのではないでしょうか。また，ヒント集とでもいいましょうか，ネットワークを使うためノウハウ集のような情報をどう共有するかという役割も広報に期待したいと思います。

村上：研究室や自室にこもってしまうと，実にくだらないことで悩んでしまいます。うちは，院生部屋がありますが，そこでワイワイやってるうちにいろいろなことが解ってくるということがあります。そこで院生がやっていることを見て，「そうか，そういうことができるのか」ということがあります。

阿草：コンピュータを知らない人ほど，専門家から見るとはらはらするようなという使い方をしがちです。

しかし，それで問題がないことを見ると，「ああ，今は，そんなことまでできるようになっているのだ」と感心するときがあります。熟練者が初心者に教わるわけです。情報の共有，コミュ

9　http://www.reflection.co.jp/参照

ニケーションが非常に大切だと思います。特に技術革新が速いとある意味でみなが初心者ですから。センターニュースを全部アーカイブしておいて，オンライン検索できるようにしておくことも考えても良いかもしれません。

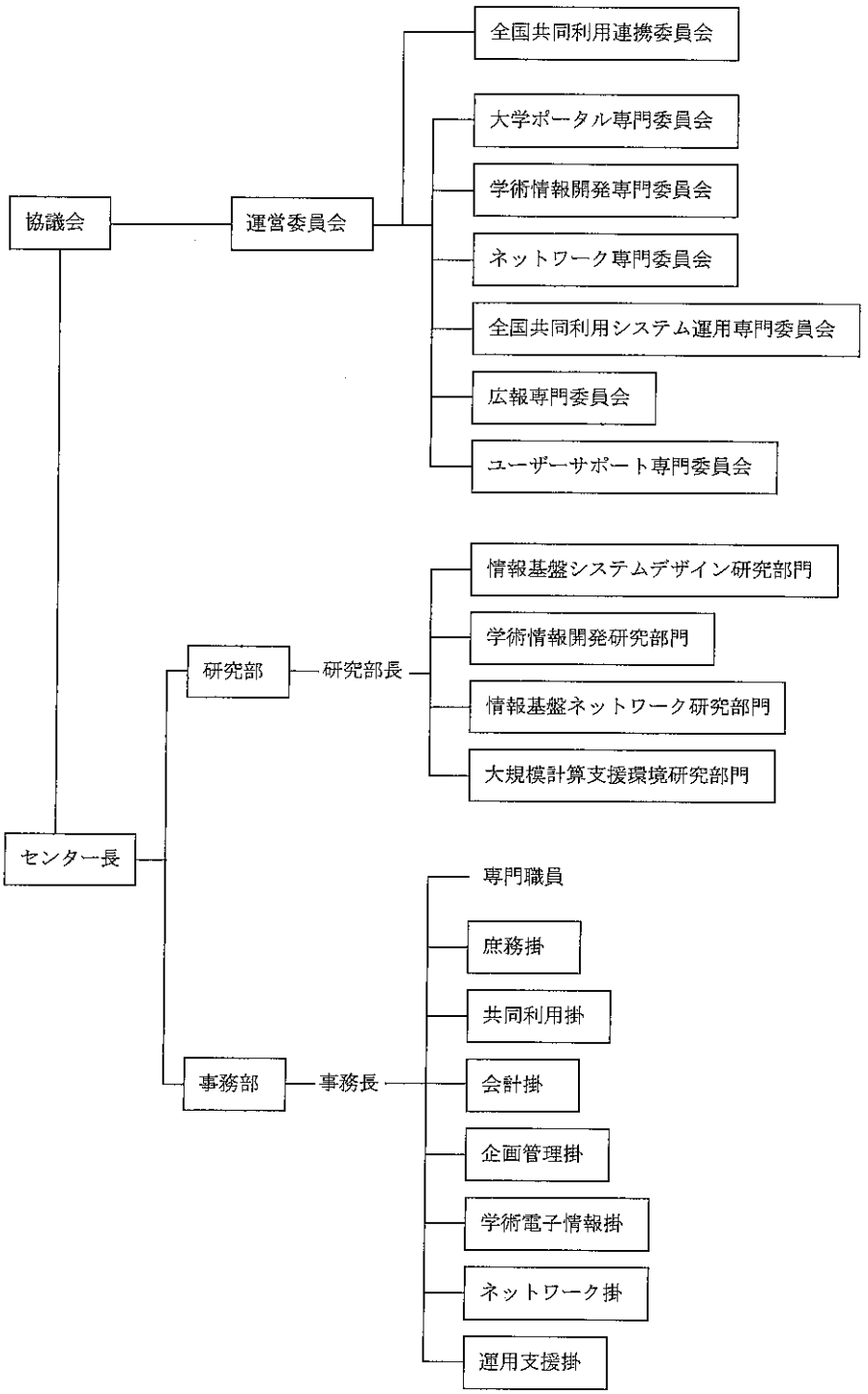
村上：市販のパソコン雑誌などを見ていると，ああそうか，というものもありますよね。

阿草：その名古屋大学版が欲しいですね。名古屋大学の特殊性という部分があります。名古屋大学では，ここの部分を直したらうまく使えるということがありますから。そういったQ&Aのシステムを作ってくださいとお願いしています。

村上：Q&A的なものはスピードの問題がありますから，これもオンラインジャーナルになるんでしょうね。

阿草：そうですが，紙のメディアには，送りつけて読んでもらうというメリットがあります。積極的には，読もうと思わなかったけれど，出張鞄に入っていたので読んだらおもしろかった，ということもあります。これは，旧来型のメディアのよい点です。オンラインジャーナルなら取らない情報でも，紙メディアだと，つい目を通して，雑学が増えるというか，ある意味での広い知識になりますので，広報の充実もよろしくお願いします。

村上：本日は，長い時間どうもありがとうございました。

（あぐさ　　きよし：名古屋大学情報連携基盤センター長　　）
（むらかみ　たかし：名古屋大学大学院教育発達科学研究科長）

名古屋大学情報連携基盤センター組織図